

荒野の彼方を志向する魂

——エミリー・ブロンテ論

大平栄子

荒野の彼方を志向する魂

—エミリー・ブロンテ論

大平栄子

I

本稿では、Emily Jane Brontë (1818-1848) の自由についての vision がいかなる発展をみせるかを、Emily の伝記とその作品 (*Wuthering Heights* と詩篇) によって跡付けることを目的とする。

Emily は30年の生涯のほとんどを地理的に隔絶された Yorkshire, Hawarth の牧師館で送った。この間、学校教育をうけるために3度、教師として赴任するために1度家を離れ寄宿学校生活を体験しているが、Emily は我が家である牧師館とその周囲に広がる広漠たる荒野を離れる度に望郷の念に駆られ、精神的苦痛はもとより「肉体的苦痛」を訴え、異郷での生活は長くは続かなかった。¹

最初に牧師館を離れるのは1824年、Emily は6歳であった。Cowan Bridge にある牧師の娘達のための学校、the Clergy Daughter's School に姉 Maria, Elizabeth, Charlotte と共に入学するが、不衛生で劣悪な環境の下で Maria と Elizabeth が肺病で亡くなり、Emily と Charlotte は家へ帰される。姉の死を嘆く陰うつな叫び声が聞こえる環境から受ける重圧に極度に内向的な Emily の心が過敏に反応したことを暗示する記録はあるが、Cowan Bridge において、我が家を取りまく荒涼たる荒野と沼地への郷愁にとらえられ健康を害したという記録はない。² 我が家にあってしか Emily が健康を維持することができないという事実を家族の者も確認するのは Roa Head の寄宿学校における体験を通してである。Charlotte は Emily の苦闘を次のように伝えている。

Every morning, when she woke, the vision of home and the moos rushed

on her, and darkened and saddened the day that lay before her.... In this struggle her health was quickly broken : her white face, attenuated form, and failing strength, threatened rapid decline. I felt in my heart she would die, if she did not go home, and with this conviction obtained her recall.³

「我が家と荒野のヴィジョン」は自分が異郷にあるという意識を一層烈しくかきたて、郷愁を募らせる。Emilyの心身の不調の原因が我が家と荒野へのノスタルジアに在ることは上記のCharlotteの言葉によっても明らかであるが、このノスタルジアの烈しさが何に依るものであるか、Charlotteは次のように説明を加えている。

The change from her own home to a school, and from her own very noiseless, very secluded, but unrestricted and unartificial mode of life, to one of disciplined routine, was what she failed in enduring.⁴

寄宿学校における「規則正しい日課の生活」が、17年間牧師館と荒野で「制限されることのない、飾り気なし」の生活を送ってきたEmilyにとっては、囚われ人の生活に等しいものであったことをCharlotteの言葉は告げている。

Roa Headでの暗い学校体験から2年後、Law Hillの学校において体験した精神的苦悩は一層激烈になり、囚われ人としての意識は決定的なものとなった。19歳までに2度も束縛の多い寄宿生活を体験したEmilyは、生涯にわたってこの束縛感に悩み囚われ人としての意識を持ち続けた。Emilyの詩には牢獄や囚人を歌ったものが多く、繰り返し執拗にEmilyは、じめじめした暗い地下室（牢獄）に幽閉された者の苦悩する魂と、そこから脱出し自由になろうとする燃えるような激しい欲求について詩にうたっている。Charlotteは「Emilyの最も愛したもの、それは自由です。自由はEmilyの鼻孔の息でした。」ということばでEmilyにとって自由が生存の基本的条件であることを伝えている。⁵ Emilyは渺茫たる荒野での孤独を愛し、我が家にあっては、秘かに自分だけの部屋で空想にふけり、想像力が羽ばたく自由な時間を必要としていた。従っ

てそれらが失われる環境では束縛を強く意識し、烈しい苦痛を感じた。異郷の不自由な生活の中で見た「家と荒野のヴィジョン」は、自由と幸福のヴィジョンであり、家と荒野へのノスタルジアは囚われ人が求める自由の地への憧憬でもあった。

家と荒野に求めた自由と幸福の vision は、Roa Head と Law Hill での体験を経て、自然に対する vision の変化と共に、微妙な変化を示し、精神的（内的）自由の vision を深化させてゆく。と同時に、「家と荒野のヴィジョン」、あるいは故郷（大地）、への執着と、「幻」あるいは靈的力への欲求との葛藤が深刻化してゆく。かつては荒野の自然の中に自由とかけりなき幸福を見出し、自然の中に天の啓示を見た Emily は、やがて自然の啓示力に対する懐疑をにおわす詩を書くようになり、また、イマジネーションや空想の力の限界も知る。

本稿は、こうした懐疑と相反する欲求によって引き裂かれ葛藤に苦しみながら、自由を求めて苦闘し続けた Emily の心が、いかなる軌跡を描きながら、最終的にいかなる自由の vision に到達したか、あるいは自由の地についての image に結実したかを、Emily についての伝記、さらに Emily の作品（*Wuthering Heights* と詩篇）を通して探ることを目的とする。（作品を通して Emily の描いた vision を探るのは、Emily の直接的資料が乏しいということ以上に、作品が Emily 自身の内的生活を表明している、すなわち魂の体験を反映しているという観点に立ったことに依る。）特に Emily の小説 *Wuthering Heights* (1847) において、死の床にある Catherine の焦がれる対象がどのように変化してゆくか、また、詩において、家についての image が最終的に何の image に収束するか、その最終的 image と自由の vision との関係について検討する。この関係から Emily の homesickness、ノスタルジアがいかなるものにその性質が変化するかを探ってみたい。すなわち最終的に Emily はどこに帰ろうとしたのか、何に回帰しようとしたのか、その回帰すべき地に対する image と Emily が求め続けた自由の vision とのつながりを見てゆこう。

II

1835年7月、Emily（17歳）は将来教師となるために必須の学校教育を受けるために Roa Head に向けて旅立つが、Miss Wooler's School での寮生活に適応できずに心身の不調を訴え3ヶ月で家に戻る。教師として赴任した Charlotte と同じ環境にありながら、Emily のみが「肉体的苦痛」を感じる程まで深刻化した束縛を意識することになった理由として Emily 自身の生来の特異な性格をあげることができると思う。しかし、性格と近密な関係をもつ他のより重要な理由は牧師館と荒野でのひっそりとした、自由で自然な生活から投げ出されたという事にある。では、Roa Head 以前の Emily の少女時代とはどのようなものであったか、あるいはその時期の牧師館での生活が Emily のどのような性格を示しているかみてゆこう。

Emily は13歳頃から英雄達が活躍する空想の物語、Gondal を妹の Anne と共に創作し始める。無謀な反乱行為、執拗な反逆そして大胆な冒険から構成される Gondal の特異な世界には悪のエネルギーと共に自由、独立を求めて闘う魂が充溢している。この魂が Emily 自身の自由への個人的熱望の投影であり、Gondal の英雄達の、反逆精神に富み不敵で激しすぎる性質が Emily 自身の感情の質を反映している。

Emily の内的世界を写し出す Gondal に情熱を傾ける一方、Emily は荒野へ自由を求めて走った。Emily は、荒野にのびやかに、ひっそりと咲くヒースのように「自由で、自然のままでも懐きにくい」少女であり、無口で、他人との交わりを嫌い、特に見知らぬ者に対しては極端に人見知りし、無愛想に受けとられがちであった。⁶ そんな Emily が荒野に出ると別人のように生き生きと喜びを全身で表現した。1833年（Emily 15歳）に牧師館を訪れた Charlotte の親友 Ellen Nussy は、荒野の Emily の様子を 'a child in spirit for glee and enjoy-

ment' と形容している。⁷ 自ら率先して Ellen を荒野に連れ出し、自由に力強く話しかける Emily、少年のように口笛を吹き拚猛な愛犬を呼び、その犬を従えて荒野の危険な奥地へとつき進んでゆく Emily の堂々たる姿、窪みをつくっている水溜りの中の小さな生き物と時を忘れて戯れる無心の遊びの子 Emily。こうした Ellen の観察から、荒野が Emily にとっていかに重要な空間であるかを知ることができる。そこでは無口な Emily も雄弁になり、危険を少しも怖れず大胆で、他のどんな空間よりも Emily らしく振る舞うことができた。外界の自然と Emily の心の中の自然とが融け合い、自然のエネルギーを胎内に吸収するかのよう Emily は、力強く風のように自由になることができた。Charlotte は、Emily にとって、故郷の丘が起伏する荒野が、単に愛でる対象としての自然ではなく、景色以上のもの「あるべきすべてのものである。」ことを、さらに作品の中で自然描写が理想化されている理由について次のように述べている。‘...they [her native hills] were what she lived in, and by, as much as the wild birds, their tenants, or as the heather, their produce.’⁸ 荒野は Emily の心の中に静止している風景、自由と幸福の原風景であろう。そこは自由の原体験の地であり、幼くして（3歳）、母親の死によって「巢のぬくもり」⁹ を喪失した Emily にとって、大地の母性的ぬくもりを感じさせる無限の壁によって包まれた空間、母胎であり、無限の拡がりによる自由の感覚、と同時に、包まれていることによる安心感と暖かみをも感じさせる絶対性をもつ空間とも言える。人嫌いの Emily が荒野に息づく野性の生物と心を交わせ、慰められ、憩うことのできた地、幸福の原体験の地でもあったのであろう。（荒野での交感の対象は、生物、木々等の具象性を供えたものから風という霊性を暗示するもの、あるいは「幻」「不思議の力」と呼ぶものへとしだいに変化してゆく。）荒野では Emily の本性が束縛されることなく、その解放された翼が奔放に羽ばたいた。

Roa Head での窮屈な寮生活を送る以前の Emily の生活は、家事に実務の手腕を発揮しながら、意識は架空の物語に傾注し、imagination を解き放し、Anne と共に Gondal の世界に遊び、あるいは Charlotte や Branwell と議論し、

教区の人々のする話を語る父のことばに耳を傾け、好きな本を読み、誰もいない荒野や岩や泥炭地を自由気ままに歩き回るといった生活で、この頃の Emily は自分に合った独自の世界を創りあげる力を蓄積しつつ、自由を自分のものにしてしようとしていた。¹⁰

このように孤絶した牧師館での自由で引き込まれた生活に慣れ親しみ、しかも長い間、独自に成長し、独自に形成された性格をもつ想像力の強い、深く物事を掘り下げることを好む精神をもつ少女にとって、因襲的で表面的な標準教育のおこなわれる規則的な学校生活は耐えがたく、生徒達の子供じみた軽い低俗な会話にも加わらず、洗練された作法を説く校長も軽蔑の対象としかならず、自分だけの世界に閉じ籠もり、孤独を深めていった。自分の行為を自分自身の厳格な法則で律し、決して他人の感化も干渉も許さぬ Emily のこうした性格を考えても、成熟度においても、当時の平均的女性とは著しい隔たりがみられ、標準教育を受けるには時期的に遅すぎた。¹¹ Emily は因襲的生活に烈しい反感を示し、拒絶し続ける一方、架空の物語の世界と荒寥とした荒野での孤独への渴望は日増しに高まり、フラストレーションと束縛への激しい抵抗力は Emily の肉体をも蝕み、衰弱しきった Emily は家へ戻される。

Roa Head から戻った翌年1836年12月13日 (Emily 18歳) に書かれた詩には、すでに地下牢がうたわれている。

Man's spirit away from its drear dongeon sending,
Bursting the fetters and breaking the bars. (NO. 5, l. 5-6) ¹²

「足枷を砕き格子戸を破って」「わびしい牢獄」から逃れ出ようとする男の魂について語られているこの詩からも、Emily は18歳にして、すでに〈牢獄〉についての意識を強く持ったことが知れる。

同時期(2ヶ月後の1837年2月)に書かれた「赤い胸のこまどり」をうたった詩は、Roa Head で、Emily が悲しみと腹立たしい想いに目ざめ憂いを知ったことを伝えている。

I heard it then, you heard it too,

And seraph sweet it sang to you ;

But like the shriek of misery

That wild, wild music wailed to me. (NO. 7, ℓ. 17-20)

荒野での曇りなき歓びと、「赤い胸のこまどり」の天使のような歌声が不幸の叫びと嘆きに変る。'a sullen hollow in a livid hillside' から Emily の心は Eden を創りあげることができたが、その荒野の自然は、翳りなき歓喜を与える楽園から、悲嘆にくれる者を慰め、悲しみを癒す隠れ家となり、かつての Eden の輝きが失われる兆しを暗示している。¹³

同年1837年5月17日の詩には、18歳の Emily の否定的自己認識、ペシミスティックな人生観、人間観がすでに表われている。

First melted off the hope of youth

Then fancy's rainbow fast withdraw ;

And then experience told me truth

In mortal bosoms never grow,

'Twas grief enough to think mankind

All hollow, servile, insincere ;

But worse to trust to my own mind

And find the same corruption there. (NO. 11, ℓ. 17-24)

「青春の希望」、「空想の虹」が消えた後に、世界の虚しさ、人間の不誠実、自己自身の墮落を知った Emily 自身の内的葛藤の苦しみ、懊悩する痛ましい魂の叫び声が陰鬱に響き渡る詩である。〈真実〉を教える〈経験〉とは Roa Head で の体験を示しているのであろうか。

次に Emily が牧師館を離れるのは1837年9月、Emily 19歳の時である。今回は Law Hill School の教師として赴任するためであった。Emily は2年前、最初の社会との直面に失敗したことによる挫折感に加えて、囚われ人としての自意識に悩まされ続けていた。このことは、牧師館を出発する1カ月前に書かれた詩句「牢獄の壁に投げつける夏の光が愛しい緑の野を語る」(NO. 15, ℓ. 40-42) に読みとることができる。

Law Hill での教師生活の実態は Charlotte が Ellen Nussy に書き送った手紙によって知ることができる。早朝 6 時から夜 11 時までの過重労働の下で Emily が受ける緊張、圧迫を懸念する姉は、'This is slavery. I fear she will never stand it.' と訴えている。¹⁴

この時期の Emily の詩には My harrassed heart beneath (NO. 34, l. 22), 'dungeons', 'prisoner' (NO. 39, l. 4), 'prison room', (NO. 39, l. 16), 'chain and bar and dungeon wall' (NO. 43, l. 7), 'thrall', (NO. 43, l. 8), 'dungeon' (NO. 46, l. 3) といった囚われ人の意識を反映することばが目立ち、調子は陰鬱で暗く、Emily の精神状態と詩作活動との相関関係を示唆している。また激しいホームシックの詩が書かれるのもこの頃である。

Far away is the land of rest,
Thousand miles are stretched between,
Many a mountain's stormy crest,
Many a desert void of green. (NO. 32, l. 1-4)

「生の重荷」を背負い遙かなる「安息の地」を目指して砂漠に行く旅人は力尽き、絶望し死をすら願う。その旅人に詩人は、胸の中でざわめく逃避への誘いの声を鎮めて、さらに日の射さぬ苦難の道を、最後の安息の地へと向かって進んでゆけと励ます。やつれはてた旅人の心の和む地は、「家の炉辺」(NO. 92, l. 16) であり、見慣れた荒野の光景である。澄みわたる大空、静まりかえった大地、羊の群れ、波のように起伏する単調な丘々、嵐が吹き荒れ、また暖かな光のさす不毛の丘にかこまれた地である故郷の荒野の風景を Emily は寄宿舎の灰色の壁に囲まれた部屋で心に映し出し、彷徨い、空想の力によって一時の慰めを得ることができたのであろう。Law Hill から戻った後に書かれた詩、(例えば NO. 92 の詩) がこのことを示している。

ところで、NO. 32 にうたわれている「最後の目的地」である「安息の地」は、「家と荒野のヴィジョン」の持つ現世的色彩とは異なる何かを暗示しているように思われる。ここに Emily の精神的成長と共に、苦悩を深めつつある者が解

放の vision を追い求めようとする兆しを読みとることができないだろうか。

Laura L.Hinkly は、'After Law Hill she understood captivity.'¹⁵と述べているが、Roa Head 後、Emily の詩にはすでに捕われていることを意識していたことを示す語句がみられる。但し、自分の中の暗闇を知る、すなわち自己自身に囚われていること、束縛の鎖は自己の内からみついていることに目ざめるのは確かに Law Hill 以後であろう。Winifred Gérin は、Law Hill での体験が Roa Head 時代には見られない渴望を生み出し、Emily はその欲望に取り憑かれ始めたと主張している。¹⁶ その欲望とは、Emily の肉体的束縛の鎖を打ち砕いて自由を与えてくれる力の存在、'the soul of nature' との完全な融合に達したいというものであり、この融合のエクスタシーが Emily の生涯の切望になったと述べている。確かに、この時期の詩 (NO. 44) には、風の夜、投獄された囚人の魂が「土塊の身を遠く離れて」、彷徨い、あらゆるもの、「大地」も「大海」も「雲なき大空も」「私」もことごとく消滅し、無となり、「魂だけが無限の広漠を翔けめぐる」という恍惚境をうたったものがあり、Roa Head 後 1 年以上経過して書かれた初期の詩 (NO. 5) にみられる解放の歓びを暗示する詩行に比べると、明らかに Law Hill 以後の方が、神秘的無の体験による恍惚感を明確に表現している詩といえる。しかも、何らかの解放力を持つ存在の力によってこのような神秘的瞬間が現出したとも考えられるが、その力の存在が W. Gérin の言う、'the soul of nature' であるかどうかには疑問が残る。解放力を持つものとして詩にうたわれているものとしては、'fancy's power' (NO. 92, l. 43) があり、The Night-Wind (NO. 146) の歌う調べの持つ力、imagination の「情あつい力」(NO. 175) 等があるが、いずれもその力には限界があり (後述)、Emily の死の 2 年前に書かれた詩にうたわれる「全能にして永遠に在ます」「命の神」、「実在」そのものである「胸の内なる神」(NO. 191) の絶対性をもつ力への vision を獲得するまでは自己との闘いの長い時を必要とし、暗闇の中を孤り手さぐりでその存在へと近づいていかなければならなかったのである。この時期の Emily にとって、待ちわびる〈力の存在〉がどのような存

在であれ、Emily の異常に緊張が高まった精神状態から、自由を与える存在への渴望が生じることも、また高度に精神化された体験をすることも十分考えることである。望郷の念に駆られ、その苦痛を伴う欲求を抑圧するエネルギーがこれまでとは違った欲求を生み出してゆく。それが Gérin の言う自由を与える存在との合一の欲求となったのであろう。Emily はこの存在をあらゆるところ、大地に、天に、地獄にすらも探し求めるようになり、夜、ひたすらその「希望の幻」を待ち望むようになる。しかし重要なことは、魂が解放されるのは「牢獄」(NO.5) からではなく「土塊の身」からであるということであり、肉体の牢獄化という概念がみられることである。それは肉体の限界性が象徴する人間存在そのものの限界性への認識が現われてきたということを意味し、魂は牢獄のみならず、自己に囚われ越えゆくことのできない閉ざされた自己自身からも解放を待ち望んでいるという認識を示している。

こうした体験の基盤となる Emily の精神的成長の秘密は、Roa Head と Law Hill との間の期間に展開した兄 Branwell との生活にもあったと思われる。家族皆の期待を担う長子 Branwell は、Royal Academy に入学するため上京するが、現実を直視することができず社会生活に失敗し、精神的に崩壊し、家に舞い戻り背徳的生活を送っていた。その Branwell と Roa Head での苦しい体験を経た Emily との間に共通の思いが通い合った。2人は、共通の情熱とそれを表わす共通の言語があり、共通の挫折の痛みによって芽ばえた同朋意識によって結ばれていた。W. Gérin は Emily が Branwell を批判せずに風や自然のように受け入れ、やがて、Branwell の体験と生活に深く巻き込まれ、それを自分自身の体験としていったと述べている。¹⁷

この時期 (Law Hill から戻った後)、Emily は、牧師館の女中としてよりは家族の一員となって子供達の世話をし愛情をそそいできた Tabitha の怪我によって Emily の肩に重くのしかかった家事労働をこなすために、詩作の時間を奪われることになった。Emily にとって詩作とは、自分の内面世界の経験を架空の物語の人物に託して伝え、想像力と共に自己を解放する行為であり、従って

こうした Emily の心が切に求めるものと現実の要求との亀裂が生じその葛藤との闘いの中で、Emily は自己の内面性をさらに深めてゆくことになった。それでも一日の労働を終えて、夜、小さな自分の部屋に帰ると、誰にも邪魔されることなく夢、幻の世界に遊び、自己の閉ざされた内的世界を観照し、しだいに、刑而上学的思考を発展させていった。あるいは、夜の孤独の時間、見えざるもの、夜の輝やかなしい存在との交信を幾度も試みるようになった。

Law Hill を退職してから4年後、Emily は四度牧師館を離れることになり、1842年2月 (Emily 24歳)、Charlotte と共に Brussel の寄宿女学校に留学するために旅立つ。学校生活の日常に従い、予備知識の乏しい外国語の厳しい毎日の日課に縛られるここでの9カ月間の留學生活も、あらゆる圧迫を呪いと感じる Emily にとって辛いものであった。その上宗派と国籍の異なるはるかに年下の少女達の中で、26歳の Charlotte ですら無口になり、孤立し、Emily はほとんど口を開かなかったと言う。¹⁸しかし以前の2度の失敗によって養われた克己力により Emily は今回の異国での深刻なホームシックを耐えたが、こうした Emily の努力が、束縛感による苦悩をさらに内向化させる原因になったと思われる。

Brussel 留学の前年に書かれた詩 (NO. 144) には、鳥の生命を犠牲にしてまで、その鎖をはずし天翔ける 'The Caged Bird' の姿を一目でも見たいと願う Emily の、自由への燃えるように烈しい願望が投影している。「生と死をとおして堪えしのぶ勇氣ある」「束縛なき魂」を与えてくれとうたう、'The Caged Bird' に続く詩 (NO. 146, 18. 11-12) からも自由の欲求の切迫感が Emily の激しい息遣いと共に伝わってくる。

自由への欲求は 'the prisoned soul' (NO. 148, 1. 22) の意識の裏返しである。しかし Emily に囚われているという意識を強く与える対象は常に一定しているわけではなく、Emily の様々な体験を経てしだいに変化している。初めは、自由な環境を奪われ、行動の自由が失われたことへの苦痛と嘆きの声が、詩の中の人物の口を通して発せられた。渺茫たる沼地や丘を歩き回り、自然の

中で息づいている生き物との対話を通して自己と対話し、心を開いてゆくという荒野の自由から投げ出された Emily は、異郷の地で故郷の丘や家の炉辺を死ぬ程度恋焦がれ、想像の中で荒野をたどろうとするが、不自由な環境の中で、心の自由の領域も侵食され、想像力のつくり出す vision は、牢獄の門（寄宿学校の門であり、さらに束縛するものを象徴するもの）が閉まる音と共に消え去ってしまうのである。

この環境という外からの拘束以外に Emily の心を縛りつけるものは、Emily 自身の内部に在るものである。学校生活の体験が、周囲の人々への不信と人間性一般への失望にとどまらず、自己の内に巣くう「墮落」への認識、さらに人間存在の属性である限界性への覚醒を促すことになる。Emily は外部の束縛の体験を通して内部の束縛を知るようになり、このように自己認識を変えてゆく。たとえ鎖に繋がれていなくとも、また牢獄の壁がないとしても、Emily は自分の中に自分を超えてゆくことのできない閉じられた自己という鎖と壁を見たということであろうか。Emily は、自分の肉体そのものを牢獄としてみるようになる。（牢獄は人間存在の限界性を象徴するだけでなく、この大地も、いや世界そのものの限界性の象徴となってゆく。）この牢獄の鎖を打ち砕こうとして、Emily は自由と幸福の原体験の地、荒野へ向かう。が、大地がかつて与えてくれた生命の輝きや胸の踊るような歓びは回想のかなたへと退き、代りに、自然はただ安息と慰めを与えるだけとなった。Imagination も自然と同様、魂にからみつく鎖を一時は解き放つ力を示しはしたが、真の解放とはならず、自由を求めて失敗をくり返す度に、Emily の嘆きの調子は非痛さを増してゆく。自由への欲求の背後に烈しい大地への執着がこびりつき、さらに悲痛な叫びとなって響き渡るのである。この荒野や家、さらに大地への執着は、他の欲求、霊的な力を求める欲望が激しくなっても虚弱化することなく、それどころか一層激烈になり、この相反する欲求は Emily の中で闘われ続けてゆく。それでも Emily は完き解放を執拗に求めてやまないのである。この葛藤が *Wuthering Heights* の死の床にある Catherine の矛盾にみちた言動に表わされていると思

う。この内部で闘われる2つの欲求にひき裂かれる Catherine の苦悩が、Catherine の発する言葉の矛盾の上にもどのように映し出されているか、すなわち Catherine の嵐が丘への烈しい望郷の思いと「あの輝やかなしい世界」への憧憬との、反対に引きあう2つの欲求が、Catherine を通してどのように描写されているかを見てゆこう。

III

Wuthering Heights において、嵐が丘の家とヒースの咲く丘へ帰りたいという嘆きに近い烈しい欲求を表現するのは Catherine Earnshaw (結婚後 Linton となる) である。病床にある Catherine は熱にうかされ、錯乱し、あらぬ幻覚に脅え体をひきつらせたかと思うと、荒れ狂う嵐のように枕を歯でひき裂き、あらぬことを口ばしる。Catherine は幾り返し執拗に自分の生まれ育った嵐が丘の家や、かしわの羽目板の寝台を思いうかべ、それを Nelly に話しては溜め息をつき、あるいは歎き、いきどおり、取り乱す。嵐が丘のもみの木の側にある自分の部屋の寝台の中にいることを夢想し、醒めては絶望の発作に襲われ、さらに烈しく家を恋しがり、Nelly に窓を開けてくれとせがみ「格子戸のそばのもみの木に鳴る風」「まっすぐに野を渡ってくる風」(P.162) に触れさせてくれ、その風をほんのひと息でも吸わせてくれと嘆願する。¹⁹ すべての物が暗黒の中に包まれている晩、Catherine は見えるはずのない嵐が丘の家の灯が見えると言ひ張り、「みてごらん！あのろうそくがともって、前に木が揺れているのがあたしの部屋よ…。」(P.164) と熱っぽく叫び、子供の頃 Heathcliff と通った嵐が丘への道を幻想の中で Heathcliff を従えて歩くのである。Catherine は真冬の北東の風に触れたいがため幾度も窓を開けることをせがむが、この「ナイフのように鋭く刺す」風は、Emily が愛し、彷徨った谷間の斜面を吹きすさぶ北風であり、Emily が愛した荒れ寂れた冬の荒野の風景を想起させ、幼い頃から親

しんできたものへのノスタルジアを一層激しくかきたてる。嵐が丘の家そして荒野、荒野に息づく野鳥、丘一面に茂るヒース、こうした幸福と自由の原風景とその世界を共有する Heathcliff へのノスタルジアが狂気と死に急ぎ立て、あるいは過去の世界へと引き戻す。ひき裂かれた枕の破れ目から鳥の羽根を引っぱり出し、「あれは七面鳥の羽根だわ。」「これはのがもで、これは鳩だわ…ここに雄の雷鳥の羽根があるわ。それからこれは…たげりの羽根だわ。かわいい鳥、沼地のまん中であたしたちの頭の上をまわっていたっけ。雨になると思ったのか巢に帰りがっていたわ。冬になってその巣を見ると小さな骸骨がいっぱいあったっけ。」(P. 160) と孤り吹きながら敷き布の上に並べては喜ぶ Catherine の姿は子供のそれであり、意識は子供の頃の世界へと戻っている。

Catherine と Heathcliff の子供時代とは、Catherine にとって「なくてはならない存在」である Heathcliff や嵐が丘、2人で飛びまわった荒野から引き離される以前、すなわち2人が共有していた世界、Eden を喪失する前の時代である。Emily は子供時代を詩 (NO. 143) において、この世の悪や悲しみ、墮落をまだ知らず、天の愛によって祝福され大地によっていつくしまれ、自己の魂をみたす光である友と共にあり、合一の夢想の中にあって分離の体験を知らぬ時代として詠っている。Catherine は「自分の世界を追われた宿なし」になったのが12歳の時であると思っているが、この年は、父親の Ernshaw 氏が死去し、嵐が丘の主人が兄 Hindley に取って代われ、と同時に子供時代の同朋 Heathcliff が召使いの地位に落とされ、Catherine と遊ぶことを禁じられたために、生まれてはじめて Catherine が孤りになったことを強く意識した年であり、また、嵐が丘の家をこっそり抜け出した2人が Linton 家の Thrushcross 屋敷に出かけ、怪我をした Catherine のみが Linton 家にしばらくの間滞在することになった年でもあった。Thrushcross 屋敷のでき事は Catherine と Heathcliff 2人が嵐が丘の家と荒野という自然を媒介として一体感で結ばれていた子供時代を2人から奪う決定的事件であった。この年から Linton 夫人として病の床につくまでの7年間の生活を振り返り、Catherine は「何もなかつ

た」(P.163)に等しいと言ひ、あるいは「底なしの穴の中をはいまわっていたような気持ち」(P.163)がすると表現する。「自分の世界を追われた宿なし」(P.163)という追放のイメージと「穴の中をはいまわる」という幽閉の意識を暗示する表現が、Catherineの無に等しい空白の7年間についての矛盾し、錯綜した意識に reality を与えている。

はるか遠くの異郷に追放されることと、牢獄に撃られることを同時にうたった詩(NO.91)と同様、追放と幽閉のイメージがCatherineの人生に纏い付いている。窓も幽閉のイメージとして作用している。からだが焼けるように熱い、外に出たいと訴え、Catherineは窓を開けてくれるよう懇願する。窓を開けると冷たい風がさっと吹き込み衰弱しきったCatherineの生命のか細い炎を消さんとするが、その風が、荒野では「半分野蛮人みたいな強い自由な娘」(P.163)であった昔へのノスタルジアをかきたてる。幽閉のイメージはCatherine自身の肉体によって、より明確に伝えられている。病の床について2ヶ月後、Catherineは「こわれた牢獄みたいな肉体」(P.196)「こんなものの中に閉じこめられているのはうんざりした」(P.196)と訴えている。Catherineの、この訴えは自己否定であり、現在の自己を越えようとして越えることのできない自己の限界性に閉じ込められて悶える、人間としての存在のあり方への抗議でもある。従ってそこから生じる‘that glorious world’への切望は、限界の衣を脱ぎ捨て自由になった魂が翔けめぐる世界への憧憬であり、それは死の情熱にまで極まってゆく。

病の床に縛りつけられているCatherineは嵐が丘への思慕を炎のように燃え立たせるが、そこにはEmilyの大地への思慕が映し出されており、それは生への情熱を暗示する。Catherineの嵐が丘への望郷と「あの輝やかな世界」への憧憬との矛盾した欲求に、Emilyの地上への確執と永遠なるものへの愛の交錯、生への情熱と死への情熱の錯綜がみられる。またCatherineが妊娠していることを考えあわせると、有限性、限界性という苦悩を背負ったまま、生存の本能に促されて生にしがみつく人間存在の不条理性を象徴しているようにも考

えられる。しかし、病の床についてから死までの2ヶ月間に、Catherineの情熱は生と死の間を激しく揺れ動きながらしだいに死へと向かってゆく。Catherineは死と共に「あたしの魂はあの丘の頂きへ飛び去っているでしょう。」(P.165)と嵐が丘への執着を捨てきれずにいることを暗示することばを発する。が2ヶ月後、肉体という牢獄からの脱出の欲求と共に‘that glorious world’へ逃げてゆくという考えを初めて口にする。さらに「あたしはあなたたちみんなとはとても比べものにならないくらい遠い高いところへ行ってしまうのよ。」(P.165)とも言う。「あの丘の頂き」は、Catherineが見た夢(Lintonと婚約すべきかどうかと迷っている時、Catherineは自分が天国にいてみじめな思いをしている夢を見る。夢の中で地上、つまり‘my home’に帰りたいと胸もはりさげんばかりに泣き叫ぶCatherineはついに天から地上に投げ下される。)の中で怒った天使たちが投げ下した「荒が丘のてっぺんの荒野」(P.120-121)を連想させ、死後の魂が丘の頂きへ飛び去るという発言に、我が家である嵐が丘、大地、そしてこの世への執着心を読みとることができる。一方「あの輝やかな世界」あるいは「遠い高いところ」というideaによって、「あの丘の頂き」とは性質の異なる、魂が永遠に回帰するところとしてのvisionが提出されている。しかし‘that glorious world’へのあこがれは、死ぬ程恋焦がれた地上的なものからの離脱を意味するとは必ずしも言えないように思う。Catherineは「あの輝やかな世界」へ逃げてゆきたいということばを発する直前に、死後も安らかな眠りにつくどころか「わたしも地下で同じように悲しんでいると思って下さい。」(P.196)と、Catherineの死を前に地獄の苦しみに悶えるHeathcliffに宣言している。この‘underground’から‘that glorious world’への移行は唐突すぎるように思われる。

矛盾や不確かさはNellyのことばにもみられる。Nellyは周囲のもの一切への関心を失ったかにみえるCatherineの様子をはるか向こうの「現世のかなた」を見つめているようだと言及するが、一方で、「肉体と一諸に現世の性格も捨去らないかぎり天国へ行ったとて島流しにされた思いでしょう。」(P.195)

と述べる。また、Catherine が死後の永遠の世界、平安の安息所への門出にあるという確信を持つかと思うと、一方、Catherine の生涯をふり返ってみると、「あの世で幸福だとは言いきれない」とも思う。ここにも Emily の相反するものへの欲求から生じる錯綜と矛盾が映し出されている。

Catherine は死を目前にして 'that glorious world' への憧れを口にするが、死後 Catherine の霊は、Nelly の言うように「地上にあるか、それともはや天国へ去ったか、いずれにせよ、今は神のみもとへ帰った」(P. 202) と「終りもなく、暗い影もない永遠の世界」(P. 202) あるいは「遠い高いところ」(P. 201) へ行ってしまったとも想像し難い。むしろ、「地上で悲しむ」Catherine の姿をより強く印象づけられるが、それは Lockwood が嵐が丘の家に泊った晩に見た夢の中に、子供の姿で現われる Catherine が話すことばに拠るところが大きい。Catherine の子供時代の寝室で一夜をあかすことになった Lockwood は、夢の中で窓の外から子供の顔が中をのぞき込むのを見、そして、その子供が「あたし家に帰ってきたの。荒野で道に迷ったの。」(P. 67) 「入れて——あたしを入れて」(P. 67) とこの上もなく悲しげな声で訴え、あるいは泣きわめくのを聞く。Catherine は「20年間さまよっていたのよ」と言うのだが、Heathcliff に騒ぎの事情を説明する Lockwood は、「あの娘は20年もの間地上をうろつきまわっていると言ったが…。」(P. 69) と、彷徨の空間を 'the moor' (Catherine が 'waif' であったと主張する空間は、迷い子になった場所である荒野であろう) から 'the earth' に変えて伝えている。Catherine にとって自由の空間であった子供の頃の荒野や沼地も、さ迷える地、脱け出ることのできない閉ざされた空間となり、その中をさ迷う子供の Catherine は家に帰りつくことができず、帰ってきても家の中に入ることができない。ここにも幽閉と追放のイメージがある。Catherine の霊 (Lockwood は夢からさめた後 'the spectre' ということばを用いている。) は20年もの間荒野をさ迷い、嵐が丘の家に執着し、'that glorious world' へと飛翔できず、地上に縛られているという印象を与える。大地から発散される現世的気配はこの作品の ending からも感じら

れる。土地の人々や Joseph は Heathcliff の死後、2人の幽霊が野原や嵐が丘の家の中を歩き回るのを見たと言張するが、2人の死後住み手がなくなった嵐が丘はあたかもこの2人の霊のすみかになったかの印象を残す。嵐が丘周辺にうごめく地霊のごとき Catherine の存在が一層 'that glorious world' についての vision への距離を大きくしている。後期の詩において、はっきりと表現を与えられた神秘体験（無の体験）に比べると、この小説にはより強烈な大地のにおいが充溢し、嵐が丘へ執拗に帰ろうとする情念の激越さを感じさせ、未来に投げかけるべき永遠なる魂の自由の地への vision よりも、嵐が丘へ向かって過去へと引き戻そうとするエネルギーの異様な放出を印象づけられる。ここに、Emily の家と荒野へのノスタルジア、さらに大地への執念深さ、生への情熱の投影がみられる。これらが Emily の内面世界で、どのような航跡を描いて最終的自由の vision の中に吸収されあるいは溶け込み無化してゆくか、Law Hill 以降（1838年以後）の詩によって検討してみよう。

IV

Law Hill から家へ戻った Emily は、投獄の苦しみや失われた自然の輝きへの嘆き、さらに、故郷に戻り家と荒野での自由を回復した後も癒されることのないホームシックの苦しみについて詩の中で告白している。

In dungeons dark I cannot sing,
In sorrow's thrall 'tis hard to smile ;
What bird can soar with broken wing ?
What heart can bleed and joy the while. (NO. 77, ℓ. 1-4)

暗い地下牢の中で飲ぶもほほえみも忘れ、悲しみに捕われた囚人は、翼折れ、心臓から血を流す鳥が空高く舞い上がることができないように、歌うことはできない。

また、Law Hill から戻って1年以上たった1838年11月11日の日付けのある詩にも、Low Hill での郷愁が詠われており、家に戻ってからも囚われ人としての意識が Emily を苦しめ続けていたことを示しているが、それだけとは言い難いものをこの詩から読みとることができる。

Loud without the wind was roaring 1

Through the waned autumnal sky ;

Drenching wet, the cold rain pouring

Spoke of stormy winters nigh.

.....
It is swelled with the first snowy weather ; 6

The rocks they are icy and hoar

And darker waves round the long heather

And the fern-leaves are sunny no more.

There are no yellow-stars on the mountain, 7

The Blue-bells have long died away

From the brink of the moss-bedded fountain,

From the side of the wintery brae—

But lovelier than corn-fields all waving. 8

In emerald and scarlet and gold

Are the slopes where north-wind is raving,

And the glens where I wandered of old.

“It was morning; the bright sun was beaming,” 9

How sweetly that brought back to me

That time when nor labour nor beaming

Broke the sleep of the happy and free.

.....
For the moors, for the moors where the short grass 11

Like velvet beneath us should lie !

For the moors, for the moors where each high pass

Rose sunny against the clear sky !

For the moors where the linnet was thrilling 12

Its song on the old granite stone ;

Where the lark — the wild skylark was filling

Every breast with delight like its own.

What language can utter the feeling 13

That rose when, in exile afar,

On the brow of a lonely hill kneeling

I saw the brown heath growing there.

It was scattered and stunted, and told me 14

That soon even that would be gone ;

Its whispered, “ The grim walls enfold me ;

I have bloomed in my last summer’s sun. ” (NO.91.41-4, 23-38, 43-58)

第1の「風がうなり」「雨が降りしきる」「嵐吹く冬の近さを語る」光景は、この詩が書かれた季節、11月のものであるとすると、6、7連でうたわれている季節はいつであろう。1連の初冬の趣きとは異なるものを感じさせる。11月の陰うつさの中、嘆きのため息がもれるが、ため息にかわって美しい‘ancient song’が聞こえてくる。「時は春、ひばりはさえずっていた(と 11)という「昔の歌」の詞の魔力によって、想像力の泉は溢れ出て、それは11月のわびしさの

中で5月の歌を唱い、故郷の光景を映し出し、なつかしき「わが荒野」へといざなうのである。そこで見た光景が6、7連の荒野の景色であろう。それは春の荒野ではなく、初雪に水かさを増した流れ、真白に凍ついた岩、「羊歯の葉はもはや日ざしに映えることもなく」、黄色の星花も釣鐘草も姿を消してしまった「過ぎし日」の冬の荒野の光景である。

8連でEmilyは「エメラルド色、緋色、金色に波うつ麦畑」よりも「北風吹きすさぶ斜面」「わたしがさまよった過ぎし日の谷間」を美しいとうたう。この詩が書かれたのが11月の北風吹きすさぶ季節であり、Emilyは自由に谷間を歩き回ることができたはずであるが、「過ぎし日」とうたっていることから、Emilyは家へ戻った後も囚われ人としての自己を回想し、Law Hillでの苦悩を詩にうたっているとも考えられる。EmilyがLaw Hill Schoolの壁に囲まれ不自由な生活をしているという設定のもとにこの詩をとらえ直すと、「過ぎし日」はLaw Hill以前の日々をさすことになる。9連以下4連は「いかなる労苦も夢も、幸福で自由な者の眠りを破ることのなかった頃」をうたったものであり、Roa HeadにおいてEmilyはすでに囚われの苦しみを体験しているので、それ以前の日々を暗示している。調子においても、うたわれている季節（8連は北風吹きすさぶ季節を、9連以下4連は「露の牧場」、ピロードのような草のはえている荒野が見渡せる季節をうたっている）においても、8連の「過ぎし日の谷間」と9連以下の「幸福で自由な」日々とは異なった過去をうたっていると考えられる。従って、8連の「過ぎし日」とは、Roa Headでの体験によって幼き日の夢が破られ悲しみを知ったEmilyが、Law Hill以後のような囚われ人としての意識に悩まされ、苦悩を深めることなくすごせた日々のことであると推量することもできる。

13連と14連は、追放された「わたし」が見ている寂しい荒野の風景である。「冷酷な壁がわたしをとり囲んでいるのです」とささやくヒースは枯れかけている。7連の「釣鐘草が姿を消してもう長い」という詩句は、13、14連のヒースが枯れゆく季節、すなわち囚われ人としての体験以後、悲しみに囚われてし

まった「わたし」の心象風景と重なりあう。この詩には、荒野へ、荒野へと向かう詩人の心と共に、荒野に立つだけでは「すぎし日の谷間」を見ることはできず、「昔の歌」が暗示する‘fancy’s power’によって、もはや昔の荒野ではなくなりつつある自由と幸福の原風景をよみがえらせようとする悲しい思いがこめられている。

囚われ人としての悲しみを知った Emily の心に、現実の荒野は、原初的自由の vision を映しださない。Emily は幼き日の楽園を喪失したのである。この自由の地、荒野の楽園を回復しようとする必死な試みが、自然の啓示力やイマジネーションの力に頼ってなされるが、これらの力の限界性につまづき苦悶する中で、過去の現実であった荒野の自由の vision とは違った、永遠なる自由の地についての vision という絶対性を志向する高度に精神化され、純化された vision を展開してゆくことになる。

1838年12月4日の詩、(NO. 92) にも Emily の心の憩うなつかしく慕わしい場所「わが家の炉辺」がうたわれている。それは「不毛の山にかこまれ冬が吠え」(l. 9)「雨がしのつき」(l. 10)「わびしい嵐が寒さむと吹き嵐れる」(l. 11) 所にある古びた家の炉辺である。その周りの風景—石の上に止まる小鳥、壁に生えたしめつばい苔、雑草の茂る庭の小道—への深い愛情、思慕を「わたし」は‘how I Love them all!’ (l. 20) と語る。しかし、このわたしがよく知っていた光景、(l. 373) は「空想の力」によって現出した世界であり、この幻の懐かしき世界にさまよう至福の時、「わが憩いの時」(l. 47) はすみやかに消え去る。「真実が空想の力を払いのける」(l. 43) 時、「わたし」の耳に「牢獄の門が閉まる音が聞こえ」(l. 44)「煩わしい心労」(l. 48) の現実にはきもどすのである。この牢獄は Law Hill School でもありえるが、また、自由を楽しむ可能性を与えられた環境にあっても逃がれることのできないもの、この詩においては‘truth’ (l. 43) と表わされているものである。この空想の力を払いのける‘truth’とは何を意味するのであろうか。

6年後、1844年9月3日の‘To Imagination’と題する詩にも「崩えくる空想

の花」を荒々しく踏みじじる 'truth' がうたわれている。この 'truth' は自然の悲しい現実、真理であり、これが夢の虚妄なることを、苦悩する心に告げるのである。この詩において詩人は Imagination の与える歓喜に対する不信を表明しながら、その力を、絶望した時にさらに望を輝かす 'benignant power' (ℓ. 34) として受け入れている。

'fancy's power' や Imagination の 'benignant power' に対する懷疑をうたう以前に、失われた自然の輝き、自然の啓示力に対する懷疑を暗示する詩が1838年5月9日にすでにうたわれている。

And, leaning on thy generous arm,
A breath of old times over me come;
The earth shone round with a long-lost charm ;
Alas, I forgot I was not the same. (NO, 60. ℓ. 13-16)

「大地は久しく失われていた魅力を取り戻して輝いた」ということは、その輝きの失われたことを詩人が嘆いた時期があったことを示している。失われていたのは大地の魅力だけではなく、自分自身の魂も昔の輝きを喪失していたのであるが、大地の寛大な腕にもたれる「わたし」は、大地の輝きと抱擁力によって、自分自身の魂をみとめ、昔そのままの自己を取り戻す力を感じることができた。大地は「わたし」自身をとり戻す生命力を吹き込む力をつかの間であれ発揮する時があったのである。

空想の中でしか、すぎし日の荒野での自由と恍惚を味わえなくなった Emily にとって、Imagination を刺激し目ざめさせる夜こそ解放へと誘う「使者」を待ちわびる時間であった。夜は、自然の力、息吹が Emily の心と共鳴し合う時であり、幼い日から Emily が夜を愛してきたことは1840年9月11日の 'The Night-Wind' と題する詩にうたわれている。夜の静寂が風の音を誘い、真夜中の風のかき鳴らす調べが Emily の心に響き渡る。その風の囁き一執拗に言いよる恋人の wooing voice に喩えられている一に、Emily はかつて自然の中に潜む天の祝福をみとめた日々があったこと、そして、その風のうたう調べが

今「わたし」の心を動かす力を失いかげ、「わたし」の心は風から離れつつあることがこの詩から読みとることができる。

Brussel 留学の前年1841年5月16日の詩にも同様の懐疑が顔をのぞかせている。

Shall Earth no more inspire thee
Thou lonely dreamer now ?
Since passion may not fire thee
Shall Nature cease to bow? (NO. 147; ℓ. 1-4)

この詩は、自然を暗示する 'magic power' を持つ「私」が孤独な夢想者に呼びかけるという設定になっているが、この 'lonely dreamer' も、呼者である「私」も共に Emily 自身であり、'magic power' に対する自己の内なる懐疑に「私」が問いかけているという構図になっている。'Come back and dwell with me' (ℓ. 8) 'Return and dwell with me' (ℓ. 28) と「わたし」は 'lonely dreamer' に呼びかけているが、これは、風のア撫による祝福を受け、自然の息吹によって導かれていた 'lonely dreamer' の心が、共に在り、心を交わしてきた長年の友(自然)から離れている証しである。荒野を吹き渡る風や、太陽の光は今だに Emily を魅了し、慰めてはくれるが、自然や大地の輝きの中にあられていた天の啓示は失われている。Emily は自然の 'magic power' への懐疑を自己への問いかけの形で提出している。しかし、一方でこの詩には大地への烈しい執着も詠われているのである。

Few hearts to mortals given
On earth so wildly pine ;
Yet none would ask a Heaven
More like this Earth than thine. (NO. 147, ℓ. 23-24)

Emily 程〈大地〉のような〈天国〉を切に求めた者はいないのである。

この詩以上に烈しく大地への愛着を詠った詩が2カ月後(1841年7月17日)に書かれている。

Let me remember half the woe
I've seen and heard and felt below,
And Heaven itself, so pure and blest,
Could never give my spirit rest
No-Earth would wish no other sphere

.....

To taste her cup of sufferings drear;
She turns from Heaven a careless eye
And only mourns that we must die !
Ah mother, what shall comfort thee
In all this boundless misery ?
To cheer our eager eye a while
We see thee smile ; how fondly smile !
But who reads not through that tender glow
Thy deep, unutterable woe ?
Indeed, no dazzling land above.
Can cheat thee of thy children's love,
We all, in life's departing shine,
Our last dear longings blend with thine ;
And struggle still and strive to trace
With clouded gaze, thy darling face.
We would not leave our native home
For any world beyond the Tomb.
No — rather on thy kindly breast
Let us be laid in lasting rest ;
Or waken but to share with thee
A mutual immortality. (NO. 149, *l.* 11-14, *l.* 25-46)

この詩にも、「私たち」を和ませる大地の優しい笑みが詠われているが、むしろここでは「私たち」の死の運命を嘆き、この世の尽きない悲惨さを身ら引き受け、深き苦悩をその笑みの中にあらわす「母なる大地」が詠われている。この「私たち」とは「大地」が生み育んだ子らで、悲しみと苦悩のこの世にありながら、祝福され浄らかな「天上」よりも「母なる大地」をいとおしみ、絶える刹那にもその優しき母の姿を探し求める。「わたしたち」は「生まれた家を去って行きはしない」「墓の向うにどんな世界があろうとも」と 'our native home' への愛を宣言するが、この「家」とは「母なる大地」であるから、「大地」への烈しい執着を示していることにほかならない、そして、それは生への執着の極とも言える。地上の悲哀を忘れえぬ魂にとって 'Heaven' は安らぎの地ではなく、'lasting rest' は「大地」の胸にある。これは世の煩いを永久にうけつけぬ死の床の安らぎであろうか。Marry Robinson の指適するようにこの大地は 'the mother and grave' であって、生み出すものであり、葬るものである。この 'lasting rest' に対し、大地と共に「不滅の生」に眼ざめるとは何を意味するのだろうか。「天界から冷やかに眼を背け」た大地と、その子らが共にする「不滅の生」という考えの延長線に、あらゆるもののつながりを自然のなかにみる vision、自然と永遠とを死の概念によって結びつけた vision を提出している詩（4年後1845年4月10日に書かれた「死」と題する詩）が位置しているように思われる。この詩においては、自然と永遠とが、子と母という関係で捉えられており、時に侵食され「無情な死」になぎ倒され枯らされる自然の限りある生命が、その母の胸を流れる「生命の甦りの潮」「永遠」を養い育て、さらに自然の生命を茂らせるといふ、生、死、永遠、そして生という連環の vision が提示されている。（但し、この「死」の詩には「大地」への確執というよりは、むしろ、大地の与える歓びを限定する死の絶対性への Emily の嘆きが映し出されており、更に、そこで提示された連環の vision にも嘆きの裏返しとも思える自己説得的調子が漂っている。）

このように、自然の営みの中に永遠のしるしを見出した Emily ではあるが、

さらに、それを自己の内部に引きよせ、そこで永遠なるもの（真の生命）と出会い、死の絶対性を越えるためには大地への確執を克服しなければならない。あれ程烈しく執着しつづけた Emily にとって、大地そのものが牢獄となる日がくる。『嵐が丘』において、死の床にある Catherine が口走る「がたがたの肉体」への嫌悪感にも限界性を背負った人間の存在を越えようとするあがきが表わされており、そこに Emily の、この世、つまり大地への執着を断ち切り、永遠性を志向する姿勢が否定的表現の中に映し出されている。しかし、Emily の2つの欲求（大地への執着と永遠なるものへのあこがれ）が1つの vision の中に統合されるまで Emily の心はさらに烈しくひき裂れ続ける。Roa Head、Law Hill での寄宿生活の体験を通して、子供の頃の自然との絆、一体感から投げ出されたことを意識しながらも、あるいはその意識ゆえに一層の烈しさで、Emily は原初的 vision にすがりつき、大地への愛をうたう一方、永遠なるものへの憧憬が募り、Emily の心の葛藤が激烈になってゆく。Emily の葛藤は、190篇あまりの詩の中で使われる非常に頻度の高いことばが 'Heaven' (82回) と 'Earth' (60回)、あるいは 'Home' (37回) であるという事によっても、その激しさ、複雑さを推し測ることができる。²¹ 'Heaven' と 'Earth' は 'Earth reserves no blessing/For the unblest of Heaven!' (NO. 186, l. 33-4) とうたわれる如く、両者が祝福とか自由という肯定的概念によって結びつけられていることもあり、'Earth rising to heaven and heaven descending' (NO. 5, l. 4) というように、2元的要素（暗闇と栄光）が溶け合うように対立が消滅し1つになることもあるが、多くの場合両者は対立する。

子供時代、自然は天の輝きを装い天の祝福を映し出し、Emily の心の中の自然もそうした自然に感応し、一体化してその生命を息づいていた。大地の胸は Emily が幼年期に喪失した母親の無条件の愛と絆の記憶を引きつづぐものであったのであろう。しかし、その大地が天の祝福を失い苦悶の声を発する時がくる。子供時代との決別と異郷での学校生活を通して Emily は分離を体験し、あらゆる存在の根拠としての自然、天の祝福と結びついている自然を失いつつ成

長してゆくが、子供時代の自由と幸福の空間への回帰の渴望は強く、Emily は失われた自然の原初的 vision を回復しようと苦闘し、挫折をくり返す。この闘いの中から解放する力についての vision が生まれ、やがてそれらへの懐疑をつきぬけ、ひたすら執念深く待ちつづけた Emily の心に〈幻〉が顕現し、‘Strange power’ への生命をかけた信仰を誇らかにうたう時がくる。そして、風のように訪れる「わたしの愛するもの」「不思議の力」への信仰は、「わが内なる神」「全能にして永遠に存在する神」への信仰へと発展してゆく。あらゆる存在が「わが内なる神」の中に存在するという絶対矛盾の形容によって〈神〉との一体感がうたわれ、この〈神〉との一体感の恍惚境において「わたし」は天の栄光を見、「わたし」自身が力を獲得し、死を超越するのである。

次に、Emily の心が絶えず向かう空間と解放する力への信仰とのつながりを詩の中の ‘home’, ‘harbour’ と ‘rock’ とのイメージのつながりによって探ってみよう。Emily の神秘体験とその失敗の苦悶が1845年10月9日の詩にうたわれている。

Then dawns the Invisible, the Unseen its truth reveals ;
My outward sense is gone, my inward essence feels —
Its wings are almost free, its home, its harbour found ;
Measuring the gulf it stoops and dares the final bound.
‘Oh dreadful is the check — intense the agony
When the ear begins to hear and the eye begins to see ;
When the pulse begins to throb, the brain to think again,
The soul to feel the flesh and the flesh to feel chain! (NO. 190, l. 81-88)

「沈黙した楽の音」が「悲嘆と苛立ちの苦闘」にざわめく胸を鎮め、死によってしか夢見ることのできない（と Emily の言う）心の調和に達したその時、「見えざるもの」が姿を現し、その真実を顕現する。「わたしの外的感覚」が去り「内なる精髓」が感じるとは、肉体の束縛から解放されたことを意味するが、「ほとんど自由」になった「その翼」は〈家〉〈港〉を見つけ、そこに横たわる「深淵を測り」「最後の飛翔」を敢行しようとする。が飛翔は失敗に終わり、

外的感覚がよみがえり「肉体が鎖を感じ」はじめ拷問の苦しみを嘗める。ここでは〈家〉と〈港〉は同格で、同じイメージ、休息の地、しかも永遠なる魂の帰りつく故郷のイメージを伝えている。それは魂が自由に憩う住処である。このイメージは3カ月後、1846年1月2日の「わが内なる神」への信仰をうたった詩においては、「不滅の不動なる岩にしっかり錨をおろす」という〈岩〉のイメージに変わる。

Holding so fast by thy infinity
So surely anchored on
The steadfast rock of Immortality (NO.191, l. 13-16)

この岩のイメージは、CatherineのHeathcliffへの愛がいかなるものであるかを表わすイメージ、「地下の永遠の岩」と呼応する。あらゆるものが滅んでもHeathcliffの中に自分が生き続けると主張するCatherineのことは、Heathcliffがあらゆる存在の基礎として捉えられる存在であることを示している。「この世」という限りある世界に閉じ込められた自己がその限界の鎖を解いて「この世」の彼方へ超出することができなければ生きる意味がないと考えるCatherineは、Heathcliffの中に自己を越えてゆくエネルギーを見出しており、しかもHeathcliffが常に自分の心の中にあり、「わたし自身」がHeathcliffであるという同一性の感情でHeathcliffと不可避的に結びついていることを主張し、自己のidentityをHeathcliffの存在によって説く。このようなCatherineのHeathcliffへの愛とは自己の中の他者であった自己自身（真髄あるいは魂、存在の根源）を知ること、深い一体感で結ばれることへの情熱であり、自己の中に在って自己を越えた存在となるためのエネルギーを獲得し、その力そのものなる欲求である。HeathcliffとCatherineの関係は、「わが内なる神」への信仰をうたう詩における〈神〉と、信仰者たる「わたし」との関係に酷似している。「不滅の岩に錨をおろす」という詩句は「わたし」の確固たる信仰告白のイメージを伝えている。

この詩において、憧れ、慕い、執着し続けた荒野も大地も、太陽や月、宇宙と

共に「生命の神」「実在」の中に消滅する。しかし、「わが内なる神」の中に「わたし」は永遠に生き続けるのであり、神への揺らぎなき信仰によって永遠なる魂の「我が家」に帰りついたのである。'heaven' から 'my home' である 'the heath' (Earth) に帰ろうとした Catherine のように大地に執着しつづけた Emily は、今やっと長き放浪の旅の末に永遠の住処を見出し、そこへの深淵を越えて飛翔し、確実に「不滅の岩」に着地したのである。内なる懷疑の深淵を越えて、Emily は信仰の極地、わが内なる神との一体感において神を知るという神秘体験に到達し、その恍惚境の中に、あらゆる葛藤、心の中で闘われる相反する欲求が呑みこまれ、完全なる心の調和、統一を認め、自由を獲得する。自我を含めて一切を放棄する無の体験によって、生の原理を知った Emily は死の彼方への obsession も死への怖れも拘泥も無化し、苦悩も死そのものも越え、自己の限界を破る。

「海」あるいは「錨をおろす」というイメージは死を暗示することがある。海を渡ってゆくと、そこには悲しみも嘆きもおとずれることのない安らぎの地があり、そこに錨をおろすということは、死による休息の地に至ったことを意味する。しかしこの安らぎは冷たく暗い死の安息であり、歓喜から切り離されている。死の誘惑を拒絶し、たゆみなく信じるものに向って懷疑の闇を歩み続ける者にこそみえざるものが姿を現わす。そして外的感覚が消失する恍惚境に没入した時、あらゆる束縛から脱がれることのできた魂が、その故郷を見出し「最後の飛躍」を試みる。この生命をかけた飛躍を成しとげた者が「不滅の不動なる岩」に錨をおろすことができるのであり、魂の帰るべき根源的母胎、永遠の安息と自由の地に確実に着地する。この時、家、荒野、大地、自然という心理的な空間は永遠の故郷の vision の中に吸収され消滅する。

Virginia Woolf は *Wuthering Heishts* には愛があるが「それは男女の愛ではなく、ひき裂かれて巨大な無秩序に陥った世界を統一する衝動である」と述べている。²² この衝動は Emily の合一への烈しい欲求が投影されたものであると思う。この欲求は、Emily の分離の体験、すなわち、母あるいは母なるもの、

大地から投げ出された体験から生じている。自己と自己をとりまく世界に存在するあらゆるものの根柢から投げ出され、宇宙から孤立したことを強く意識する者はより烈しく合一の体験を求める。すなわち「人間の本質を表わすもとななる力」そして「神」との合一を。²³しかし、人間としての自己から解放する力をもつものについての vision を深める上で障害となるのは、Emily が最も愛し慕うもの、すなわち 'my home'、大地への執着であり、この2つの vision にひき裂かれてすべてを統合する1つの vision に到達することができないのである。すべてを安息へと結着をつける死の静けさへの欲望と闘い、失敗をくり返しながらも内面の観照、内省によって自己の魂を見つめ続けた Emily は、魂の内奥にひそむ自己の世界の神秘へと一歩一歩近づいていったと思われる。大地への愛着と、永遠なるものへの憧憬とに引き裂かれる苦悶に耐えながら、Emily は自然の対象から目を転じ自分の中に求めるものを探究しはじめたにちがいない。自然の中にも宇宙にもたえず探し求めてきたものを、Emily は、自己の存在の奥へと足を踏みこみその中心へと近づいていった時、そこに発見する。真の生命、神の「息吹」、解放の力、永遠なる存在との合一の瞬間、Emily は自己の内にその力を感じとり、自己を超越すると同時に分離を越える。自己が全宇宙、全存在と密着に結び合わされ、1つであり、あらゆる存在の根源であることを知るのである。

Emily が最も愛したのは荒野であった。が、その愛するものへの執着と求めつづける vision との葛藤を徹底的につきつめ、懐疑を無限に徹底化したところに現出する恍惚境こそ、Emily が真に求め続けてきたものであり、その一瞬に永遠なる魂の故郷、限りなき幸福と自由の故郷を見たことであろう。

脚 注

1. Elizabeth Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë*, Penguin, 1975, reprinted in 1981, p.158.
2. Winifred Gérin, *Emily Brontë: A Biography*, Clarendon Press.Oxford, 1971,p.10

3. Elizabeth Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë*, p.158.
4. Ibid., p.158.
5. Ibid., p.158.
6. Winifred Gérin, *Emily Brontë : A Biography*, p.34.
7. Ibid., p.34.
8. Emily Brontë, *Wuthering Heights*, Penguin, 1847, reprinted in 1972., p.34.
9. カストン・バシュラール著【火の精神分析】(前田耕作訳 せりか書房)、1977、
p.75.
10. Winifred Gérin, *Emily Brontë : A Biography*, p.49.
11. Elizabeth Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë*, p.178.
12. 本稿において、詩からの引用はすべて次の版を使用した。 *The Complete Poems of Emily Brontë*, ed. by C. W. Hatfield, Columbia Univ. Press.1941.
13. Elizabeth Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë*, p.158.
14. 1837年10月2日付けの手紙。 *The Brontë Letters* selected by Muriel Spark, Macmillan, 1966, p.69
15. Laura L. Hinkly, *The Brontë : Charlotte and Emily*, Hammond, 1947, p.131.
16. Winifred Gérin, *Emily Brontë : A Biography*, p.86-87
17. Ibid., p.57-59.
18. Elizabeth Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë*, p.225.
19. Emily Brontë, *Wuthering Heights*, Penguin, 1847, reprinted in 1972.
20. Mary Robinson, *Emily Brontë*, 1883, cited in *Emily Brontë : Wuthering Heights*, Casebook series, ed. by Miriam Allott, 1970, p.90
21. *A Concordance to the Complete Poems of Emily Jane Brontë* ed., by Shinichi Akiho and Takashi Fujita, Shogakukan, 1976.
22. Virginia Woolf, *The common Reader*, The Hogarth Press, 1975, First Series, p.202.
23. Ibid., p.202.